パパの手料理

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パパの手料理

【Ｎコード】
Ｎ６０１３Ｄ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
お母さんがいない。それで子供達の為にお父さんは頑張って料理をするがこれが実に。最近こんなお父さんも減って料理上手な人が増えていますね。

第一章

パパの手料理

「じゃあ金曜いないから」
「ああ」
準は妻の佳子の言葉に頷いていた。
「それで帰って来るのは確か」
「土曜よ」
佳子は夫に対してこう答えた。
「それまで御願いね」
「ああ、わかった」
準はあらためて妻の言葉に頷いた。
「一日だけならな」
「お留守番位できるわよね」
「おい、ちょっと待て」
今の妻の言葉にはクレームをつけた。
「それじゃあ何だ？俺が何もできないみたいじゃないか」
「だって実際にそうだし」
佳子も佳子で容赦ない言葉を夫に告げる。
「お洗濯もお掃除もできないし」
「うっ」
こう言われると反論出来ない。実際に彼は洗濯も掃除もやってみるとかえって滅茶苦茶にしてしまうのが常であるのだ。それがあまりにも酷いので家事は全部佳子がしている程である。こうした旦那というものは残念ながら何処にでもいるものであるが準もその中の一人であるのだ。外見は太り気味でそろそろ頭が薄くなってきているところからも如何にもといったおじさんだけにそれが絵になるのもまた悲しい。なお佳子も若い頃はジャッキー＝チェンをそのまま女の子にしたような感じだったのに二十歳になるととびきり奇麗に

なって今ではあちこちに肉がつきだしている。こちらもこちらで典型的な中年のおばさんであった。
「そうでしょ？だからよ」
「じゃあ俺は何もするなってことか」
「そういうこと」
またはっきりと妻に言われた。
「わかったわね。本当に何もしなくていいから」
「じゃあ家事は誰がやるんだ」
「麻奈と加奈がいるじゃない」
二人の娘である。二十歳の頃の佳子に似た美人姉妹である。麻奈が中学一年で加奈が小学六年だ。一歳違いだがまるで双子のような姉妹である。
「二人に全部言ってあるから」
「俺はいるだけか？それだと」
「そうよ」
またはっきりと言われた。
「お風呂とかも全部言ってあるから。仕事から終わったら御飯食べてお風呂入って寝て」
「いつも通りか」
「そう、いつも通り」
こうも言われた。
「だから本当に何もしなくていいから。わかったわね」
「それはわかったが」
準はここまで聞いてあらためて腕を組んで首を捻るのだった。
「何か。俺を除け者にしていないか？三人で」
「はっきり言ってそれに近いわね」
また随分な物言いであった。
「だってあなた家事は何も出来ないから。動いてもらったら困るのよ」
「困るのか」

「ええ、困るわ」
容赦なく言う佳子であった。
「わかったら大人しくしていてね。一日だけだし」
「全く。人を危険物か何かみたいに言いやがって」
「仕方ないでしょ、本当に何も出来ないんだから」
佳子の言葉はさらに容赦がなくなる。
「バッキーの散歩だけしていればいいのよ」
「俺ができる家の仕事はそれだけなんだな」
「そうじゃない、実際に」
バッキーはこの家の飼い犬である。阪神ファンのこの夫婦がわざわざかつてのエースの名前をつけたのである。バースにしようとも思ったがそれだとありきたりなのでこの名前にしたのである。
「だからよ。わかったわね」
「ああ、わかった」
「それじゃあね」
こうして佳子は妹の家に遊びに行くことになった。何でも美味しいものを食べに行くという。準は自分も美味しいものを食べたかった。この時はそれは少しだけの気持ちだったがすぐにかなり大きくなった。そうしてそれが騒動の元になるのであった。
その金曜日。準は会社の中であれこれと考えていた。考えることはこの前の妻との話についてであった。どうしようかと考えているのである。
「何か面白くないな」
正直何も出来ないと思われているのが癪だったのだ。
「このままだと。どうするか」
ここで頭の中で美味しいものを食べたいという気持ちとつながった。これで彼はあることを思い至ったのであった。
「そうだ、ここは」
これが騒動のはじまりであった。実にはた迷惑な。
「これであいつも黙るだろう。見ていろ」

会社の中で一人不敵に笑う。社員達はそれを見て課長がおかしいとヒソヒソ話をはじめたのだが今の彼にはそれも全く目に入らないことであった。

第二章

その夜。彼は色々と買い物をして家に帰った。家に帰るともう娘達が家事の殆どを済ませてしまっていた。
「お帰り、お父さん」
「もうお風呂も沸いてるよ」
「あっ、早いな」
彼は娘達のその言葉にまずは頬を緩ませた。何だかんだで娘達は可愛いのだ。
「もうなのか」
「洗濯もしておいたから」
「ゆっくりしてね」
二人は本当に双子みたいに息のあった感じで準に言う。準はそんな娘達の言葉を聞いて頬を緩ませ続ける。その中で彼は言うのだった。
「そうか、だったらな」
「何？」
「夕食はお父さんに任せておいてくれ。もう休んでいいぞ」
「えっ！？」
「今何て！？」
二人は今の言葉を聞いて瞬間的に顔を凍りつかせたのだった。
「お父さんお料理出来ないじゃない」
「それでするの！？本当に！？」
「何、大丈夫だ」
しかし準は不安を露わにする娘達にまた言う。
「お父さんだってやればできるんだ。だからな」
「ねえ加奈」
麻奈が不安に満ちた顔で加奈に声をかけた。
「大丈夫だと思う？本当に」

「お姉ちゃんはどう思ってるの？」
「加奈と同じことよ」
これで充分であった。
「絶対にね」
「そう。じゃあやっぱり」
「大変なことになりそうね」
麻奈はそう言ってふう、と溜息をつくのだった。
「折角バッキーのお散歩も御飯もやって後はこれだけだと思ったのに」
「最後の最後で大変なことになりそうね」
加奈もこれからのことを絶望視していた。自分達の父を完全に信頼しているからこそであった。信頼は何も期待につながるだけではない。時として絶望にもつながるものである。それが今であった。二人は明らかに絶望していたのであった。
しかし準は乗り気であった。自分は絶対にやれると思っていた。すぐに食材を持って台所に入るのだった。台所はいつも佳子によって奇麗にされている。それに今日は麻奈と加奈がとりわけ念入りに掃除してありあちこちがピカピカと光ってさえいた。彼はそこに自信満々で乗り込むのであった。
「さてと、まずは調味料だな」
「何処にあるかわかってるの？」
麻奈が心配そうに父に問うた。
「そこだけれど」
「ああ、そこにあるのか」
知らなかった。はじめて知った顔で麻奈の指差した方を見るのが何よりの証拠であった。
「わかった、じゃあまずはお塩だな」
「スプーンで加減してね」
今度は加奈が言う。
「わかってると思うけれど」

「ああ、わかってるぞ」
実はわかっていなかったのがわかる言葉だった。目が泳いでいるからそれは一目瞭然であった。彼は嘘がつくのが下手な性分であったのだ。
「それで何を作るの？」
「何かって？」
「だから何を作るのよ」
麻奈はさらに不安を感じて父に問うた。
「それは考えてあるのよね」
「ステーキとサラダさ」
「ステーキとサラダ！？」
「案外楽！？」
麻奈と加奈はそれを聞いて顔を見合わせた。案外調理が楽なものであった。

第三章

「どうだ、それで」
「いいんじゃないの、それで」
「ねえ」
二人の娘は父の言葉を聞いてそう返した。
「それならお父さんでもね」
「幾ら何でも」
「よし、じゃあやるぞ」
「やるぞってちょっと」
「待ってよ」
いきなりフライパンの上に肉を置く父にクレームをつける。
「そのまま焼くつもり？」
「違うのか？」
「違うわよ」
麻奈が驚きを隠せない顔で父に述べる。
「まずは油引かないと」
「それにお肉にお塩と胡椒」
加奈も言う。
「全体に塗るようにしてね」
「つけてね」
「わかった。そうするのか」
準は娘達の言葉に頷いてそうする。本当にはじめて知ったのであった。
「成程な」
「成程なじゃなくて」
「常識よ、本当に」
二人は呆れながら父に言う。
「それでね。それが終わったらまず時間置いていいから」

「そうなのか」
「ええ、それで今度は」
麻奈はかなりくどい感じで説明する。
「サラダね。これは包丁で切ってね」
「わかった」
「あっ、シーフードサラダなの」
加奈はここで父が出した食材を見て言った。
「手はよく洗ってね。肉の匂いがついたら駄目だから」
「わかった。じゃあ」
「ええ。とにかくサラダは細かくね」
加奈はさらに父に教える。
「切って。食べやすいようにね」
「わかった。こんな感じだな」
「包丁切る時は左手を添えて」
加奈は今度はそこを指摘する。見れば準は右手だけで切っている。かなり乱暴に。
「それで指も折り曲げて。そう、そんな感じ」
「何だ、随分使いにくいもんなんだな」
準は包丁を切りながら困った顔になった。
「包丁っていうのも。思ったよりもずっと」
「お父さん、ひょっとして包丁持つのもはじめて？」
「馬鹿言え、小学校の家庭科じゃ持ったぞ」
実質はじめてである。それまで何十年と持っていないということだから。
「はじめてじゃない」
「そうなの」
「そうだ。それにだ」
「包丁振り回さないのっ」
右手に持った包丁をそのままに身振り手振りで言いはじめた父を叱る。

「わかったからまずは野菜切ってシーフード切って」
「ああ、わかった」
「ドレッシングは冷蔵庫の使っていいから」
「よしっ」
野菜もシーフードも切り終えて皿に入れる。かなり雑然としていてサラダには見えない。何か煮た後のようであったが麻奈も加奈もそれはあえて言わなかった。
「これでいいな、それで」
ドレッシングを入れる。しかも大量に。
「そんなに入れたら」
「駄目でしょ」
二人はそれを見てまた呆れる。しかし準はこれもわからない。
「駄目なのか」
「まあいいわ、入れた後だし」
「後でかき混ぜるから」
それは目を瞑ることにした。そうして今度はステーキに入るのであった。
「いい？」
今度は麻奈が言う。
「焼き加減だけれど」
「ああ、レアとかミディアムとかだな」
流石にそれはわかっているようだった。しかし麻奈はそれを聞いても全く安心してはいなかった。
「そうだけれど。いい？」
「まだ何かあるのか」
「レアでも単なる生焼けとは違うから」
「そうなのか」
「お肉の焼ける匂いがしてこないと最低限駄目よ」
そう父に対して言う。
「それはいいわよね」

「そうだったのか？」
「そうだったのかってねお父さん」
また呆れた顔になって言葉を返す。
「そうなのよ。油はひいたわね」
「ああ」
それはもうやっていた。肉に一緒についていた白い固形の油をひく。塩と胡椒も娘達に言われていたので既にしている。最低限のことは何とかしていた。

第四章

「じゃあ。そこにお肉を入れて」
「こうだな」
「そうそう」
とりあえず肉を置いた。だが問題はそれからだった。
「暫くそのままね」
「焼くだけだな」
「ひっくり返す時になったらまた言うから」
「そろそろか？」
「いえ」
父の言葉に首を横に振る。彼女にはタイミングがもうわかっていた。
「まだよ。けれど」
「もう少しなんだな」
「お肉の脂が焼けてからだから」
そこをじっと見ていた。見ればもう少しだった。
「そうね、今よ」
「よしっ」
その言葉を受けてひっくり返す。後はまた程よく焼いて繰り返すだけだった。
「これでよしね」
「お姉ちゃん、サラダテーブルの上に置いておいたから」
丁度いいタイミングで加奈が言ってきた。
「御飯入れておくわね」
「ええ、御願い」
麻奈はそう妹に答える。
「そうそう、後スープを温めておくわ」
「あっ、昨日の野菜スープね」

「ええ、それ」
これは昨日二人が佳子を手伝って作ったものである。これで御飯は置いておいて完全な洋食となったのである。見れば加奈はもう食器の用意もしている。後はステーキを入れるだけであった。ところがここで。
「もう入れて」
「よしっ」
父が肉を皿に入れるのを失敗した。肉を跳ね上げてしまったのだ。
「あっ！」
「しまった」
何故か肉を跳ね上げた本人の言葉の方が暢気だ。麻奈は慌てて皿を手に取ってその肉を受け取った。何とかセーフであった。
「気をつけてよね」
「ああ、済まない」
「まあこれで何とか終わりね」
それでも肉は焼け終えた。そのことにほっと胸を撫で下ろす。
「よかったよかった」
「ああ、見てみろ」
準はここで誇らしげに娘達に対して言う。
「できたな」
「そうね」
「ええ」
娘達はそんな父に反比例するかのように白けた顔になっていた。
「何とかね」
「できたって言うのかしら」
「お父さんはやればできるんだ」
娘達の白けた顔も言葉も見ずに聞こえずに述べる。
「これでわかったな」
「わかったから」
「とにかく食べましょう」

父の言葉を受け流しながら言う二人だった。相手をしていてはきりがないからである。そうしたところは実にクールな二人であった。
何はともあれ味は食べられるものであった。実質的には二人が作っているから当然であった。だが準はこのことでやけに自信をつけてしまったのであった。
次の日。帰って来た佳子に対して誇らしげに昨日のことを言うのだった。
「それ本当！？」
「ああ、俺が嘘をついたことはあるか？」
「ないわね」
それは彼女が一番よく知っていた。昔から正直なのだ。何かを思いきり間違えることはあっても嘘はつかない。それは彼女も認めるところであった。
「じゃあ本当のことなのね」
「美味かったぞ」
今度は自画自賛する。
「俺は家事だってできるんだ、それがはじめてわかった」
「そうなの」
「ああ。それじゃあ今からな」
そうして彼は犬のロープを持ってまた言う。
「散歩に行って来る。それじゃあな」
「車には気をつけてね」
これは挨拶のようなものであった。
「いいわね」
「ああ、じゃあ行って来る」
こうして準は得意げな顔でバッキーの散歩に出て行った。佳子はそれを見届けてから家のリビングに入った。そこには彼女にとっては都合よく娘達がいた。彼女は娘達に尋ねた。
「お父さんだけれど」
「大変だったわよ」

「ねえ」
これが娘達の返答であった。佳子もこれは予想していた。
「そう、やっぱりね」
「だって何も知らないし」
「動きも危なっかしいし」
二人はそれぞれそう母に述べる。
「一から十まで側にいて教えたんだから」
「包丁の使い方だって知らなかったしね」
「かなり大変だったのね、それじゃあ」
娘達からの話だけで全てわかった。そこまで聞いてふう、と溜息をつくのだった。
「お疲れ様」
「有り難う、お母さん」
娘達は母の今の言葉ににこやかに笑って応えた。
「けれどあれよ」
「もう二度とね」
「それはわかってるわ」
佳子も心得たものだった。二人の話だけでそれは決めていた。
「お父さんにはね。二度とお料理はね」
「けれどお父さんはわかっていないみたいなのよ」
「そうよね」
麻奈と可奈は困った表情を見合わせて言い合う。
「自分で自分はわからないのね」
「困ったことにね」
「男は皆そうなのよ」
また実に意味深い佳子の言葉であった。
「自分ではできる、わかったつもりでも」
「実は違うのね」
「よく覚えておいてね」
そう娘達に語る。

「それを気付かさせずにフォローするのも女の子の仕事だってね」
「何かそれって」
「凄く大変そう」
「それがそうでもないのよ」
娘達に笑って述べる。
「かなり抜けているから」
「そうなの」
「ええ。あんまり力を張らずにね。やるといいわ」
「わかったわ」
「じゃあお父さんにもね」
「ええ、今まで通りね。気付かさせずに」
そう話をするのだった。家の女達の話には全く気付かずに能天気に散歩を続ける準は外でくしゃみをした。けれどそれを風邪のせいにするだけであった。

パパの手料理　　完

２００７・１２・１

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6013d/

パパの手料理

2010年10月8日15時04分発行